

しあわせ

9 月 号



蓮華の国に うまれては
 真如のさとり ひらきてぞ
 生死の園に かえりきて
 まよえる人を 救うなり

(しんじんのうた)

「手を合わす母」

「暑さ寒さも彼岸まで」と言われてきたが、年々、暑さが厳しくなり、朝夕は涼しさを感じるようになっていても日中はまだまだ厳しい日が続く。

お盆に続いて秋のお彼岸がすぐやってきてお墓参りが続く。

お盆はそもそも亡き人を偲び、供養することから始まったのでお盆のお墓参りは当たり前前としても、

お彼岸のお墓参りはなぜだろう。

本来、お彼岸は昼夜の時間が同じになる春秋の氣候の良い時期に始まった法要儀式である。人間として生まれてきた意味を問い、頂いた我が命を喜び感謝することから先祖の恩を思い、感謝の意を表してきたのだろう。

ご恩、頂いた我が命を感謝し、ご先祖への御供養を大切にすることに幸せが宿る。

恩という漢字は、心の上に因縁の因と書く。心に今ある因縁を浮かべるから「おかげさま」となる。

しあわせは、欲望満足の上にあるのではなく、「おかげ」がわかるところに満ちている。

法座案内

△彼岸法要▽

九月 十一日(日) 昼席

十二月(月) 朝席・昼席

講師 能美 潤史 師

(龍谷大学准教授)

△法味の会▽

九月 十五日(金) 午前十時〜

法話 住職

△広島聞熏会 ―無量寿経を読む―▽

九月 二十五日(月) 午後二時〜

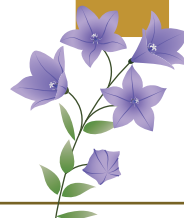
講師 内藤 昭文 和上

(本願寺派司教)

会費 一〇〇〇円

府中町山田二丁目一五十三
 栢原山 龍仙寺

電話(〇八三二八)一四八二



今月は正信偈の意識「しんじんのうた」の一節をいただきます。

蓮華の国に うまれては

真如のさとり ひらきてぞ

生死の園に かえりきて

まよえる人を 救うなり

浄土に生まれたならば、仏のさとりをひらき、ただちにこの娑婆に還り来って、苦悩の人々を救っていく。これは還相回向(げんそうえこう)といつて、浄土真宗の大きな特徴です。ともすると、浄土とはただ救われていくだけの一方的な世界と思われがちですが、親鸞さまは、浄土に往った人は、ただちに還ってくるという説かれました。浄土に生まれて仏となるということは、あらゆる人々を救える身となることにほかならないからです。浄土に往かれた大切な人たちは、今ここに還り来って、はたらいてくださっている方なのですね。

八月のことですが、祖母の初盆をお寺のなかでお勤めいたしました。八才の長女は、今でも、ときおり祖母の寝ていた部屋に入ってお話をするのだと言っていました。部屋には子供たちが色鉛筆で描いた「おばあちゃんだいすき」という文字が大きく貼ってあり、タンスの上には祖母の写真も飾ってあります。部屋に入るとおばあちゃんの匂いがして、写真を見つめていると「ありがとう」と、やさしい声が聞こえ、おばあちゃんがつこり笑ってくれるのだそうです。すっかり祖母のことを覚えていて、会話までしてくれていることを、心から、うれしく感じました。

長女がそうしているように、私たちは、お仏壇やお墓のまえなどで、先立っていかれた方に話しかけます。亡くなった方と対話をする、これは人間特有かもしれませんが、こういう事態なのでしょうか。梯實圓和上は、そのことについて次のように仰っていました。

「あれは中々ええですなあ。対話が成立する

いうことは、その方はその人にとって生きているんですな。命とはそういうもんでっせ。」命や心は、肉眼で見ること、手でつかむこともできません。しかし、無いわけではなく、できません。命や心とは、有るか無いかではなく、それを感じとれるかどうかの問題なのです。ですから、たとえ一日中おなじ生活空間にいても、互いに心ない態度で接し、対話がまったく成立していないならば、それは出遇っているとはいえませんが、言葉をかえせば、たとえ姿は見えなくても、その方のぬくもりを感じとり、その心に触れているならば、その人にとってその方は、亡くなってはいないのです。命とは、そういうものなのですね。

ただし梯和上は、続けてこう言われました。「せやけど、ほとんどの場合は、自問自答で終わってますなあ。これが自問他答になるとおもしろいんですけどな、まあ、これはお念

仏通さんと、出てこうへんやろなあ。」

たしかに私たちは、ほとんどは自分で答えを用意して問いかけているのかもしれませんが、自分の聞きたい答えをその方に言わせたいだけなのですね。それでは対話とは言えません。しかし、お念仏のなかに問いかけるならば、話は変わるのだと言われるのです。自問他答、思いもよらない答えが返ってくるのだと。ときには聞きたくない言葉すら、耳をふさいでも聞こえてくるでしょう。そこにはまさしく「対話」の成立する世界があるのです。

生死の園に かえりきて

まよえる人を 救うなり

ともにお念仏いただきましたましよう。一声一声の中に、大切な方が還ってくださいしています。念仏者は、その懐かしい方々と対話しつつ、ともに歩み、おなじ浄土へと生まれさせていただくのです。そして私たちもまた、大切な人たちのもとに還らせていただくのです。